

教材の道徳的価値を自分のこととして捉え、自己を見つめ考えを深める生徒の育成

—道徳科における体験的な学習と終末の時間の充実を通して—

石巻市立河南西中学校 菅井 龍成

1 主題設定の理由

(1) 教育課題から

「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編」では、改定の基本方針として「道徳教育を通じて、個人が直面する様々な状況の中でそこにある事象を深く見つめ、自分はどうすべきか自分に何ができるかを判断し、そのことを実行する手立てを考え、実践できるようにしていくなどの改善」の必要性が示されている。

(2) 生徒の実態から

全体的にどの教科でも抵抗なく意見交流ができ、特に道徳科の授業では他人の意見に興味を持ち、ペアやグループで円滑に話し合うことができている。道徳科の授業での発言や道徳ノートへの記入内容から、道徳的価値の大切さを理解し、人間として望ましい判断や、よりよい生き方を志向することができると見て取れる。一方で、学校生活では普段の生活や学級内での諸問題の解決に向けた話し合いにおいて、他人の意見に同調し、級友と同じように行動することで安心感を得ている生徒が見られる。これらの様子を見ると道徳の実践意欲や態度を高めることが課題と感じる。

在籍生徒の道徳科に関する意識を把握するために、アンケート調査を行った（図1）。

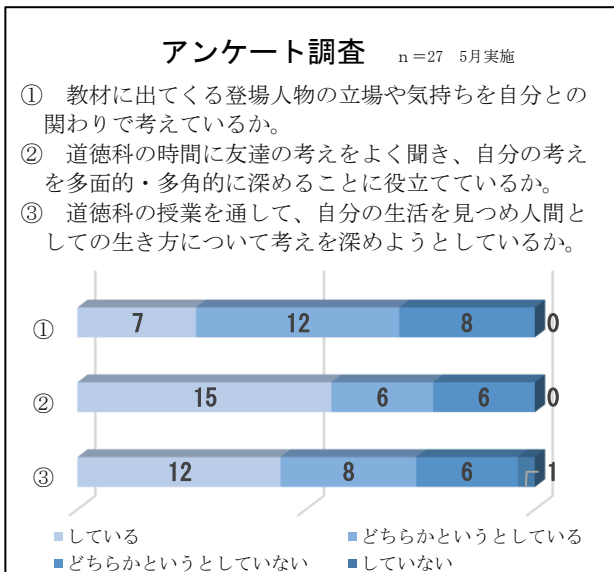


図1 アンケート調査の結果

教材に出てくる登場人物の気持ちを自分との関わりで考えること、級友の考えを聞き、自分の考えを多面的・多角的に深めること、自分の生活を見つめ

人間としての生き方について考えを深めることについて7割以上の生徒が肯定的に回答しており、道徳科の授業の意味を考え、前向きに取り組んでいることが分かる。

生活の様子とアンケート調査から総合的に判断すると、生徒の考えが教材の中だけで終結してしまい、自分の事になっていないため、頭では分かっているが、道徳科の授業で学んだことを実践したり態度に表したりすることまでには至っていないということが考えられる。

(3) 教師の指導の課題から

ねらいに迫るための発問や授業展開の吟味が足りない上、教材に関連する自分の経験を想起させる学習活動が十分ではなかった。また、本時の道徳的価値との関連を自覚させるための手段も不足し、生徒に道徳的価値を自分自身との関わりで捉えさせられなかったことが、日常生活において道徳的な行動として発現していない場面が見られる原因と考える。

以上のことから、生徒が教材の道徳的価値を自分のこととして捉え、自己を見つめ考えを深める生徒を育成したいと考え、本主題を設定した。

2 研究の内容と方法

教材の道徳的価値を自分のこととして捉え、自己を見つめ考えを深める生徒を育成するためには、教材の内容を自己と結び付けられるようにしなければならない。その方法として、道徳的価値に迫る体験的な学習（役割演技・動作化）を通してその時々感情をイメージしながら考えることと、自己を振り返って、自分の生活をよりよくするために考えを深めることが必要だと考えた。そこで以下の2点について手立てを講じることとした。

(1) 手立て1：体験的な学習

道徳的価値を自分のこととして捉え、登場人物の心情に自分を重ねて考えるための方法として、役割演技を取り入れる。演技をする際には、役割を交代させることで、相手の気持ちや立場の理解を一層深めさせる。また、どのような演技方も肯定的に受け止め、称賛する姿勢を授業者が率先して示すことで他人の考えや発表を受け止める態度・雰囲気育てる。さらに、「演技の上手・下手は学習に関係ないこと」「級友の演技を笑ったり、馬鹿にしたりしないこ

と」を生徒に徹底して守らせることで、安心感を持って役割演技に取り組めるよう指導していく。

以上のことに留意しながら役割演技に取り組ませる。「再現」ではないことに気を付けさせながら、主人公の経験した内容や心情をイメージさせながら追体験させる。体験を通して感じたことや考えたこと、思い出したことを振り返り、道徳的価値の理解を深めさせたり新たな気づきを生み、視野を広げたりできるようにする。

(2) 手立て2：終末の時間の充実

自己を見つめ考えを深める終末の時間の充実として、道徳的価値に係る教師の説話を行う。生徒の道徳的価値に対する思いを整理し、一層深めさせるように生徒の体験に似通った教師の実体験に基づいた説話をする。また、説話に付随して、道徳的価値を別な角度から深めるために目的や内容項目に応じて、ことわざや格言などを取り入れる。

以上のことを、道徳的価値についての考えを深化させるための問いを持たせることをねらいとして、授業の振り返りの後に行う。

3 授業実践Ⅰの取組

主題名 日々を見つめて「A（2）節度、節制」
教材名 「早朝ドリブル」(東京書籍 新しい道徳3)

〔本時の展開〕

- 1 教材のテーマに関心を持つ。
- 2 課題（テーマ）をつかむ。
- 3 範読を聞き主人公の生活の様子を捉える。
- 4 主人公の言動について役割演技を行う。演技の工夫理由を伝え合うことで、だめだと思ながらも改善できない主人公の気持ちを自分のこととして捉える。
- 5 主人公の自分に対する思いについて考える。
- 6 「生活のリズムを整える」とはどのような生活なのか自分の生活を振り返りながら考える。

(1) 体験的な学習（手立て1）

主人公が友達の話聞いて、焦りや不安を感じている心情を自分のこととして捉えさせるため、役割演技を試みた。演技をする場面を明確に示し、感情を乗せる演技方の工夫や臨場感を持たせたところ、主人公の体験と類似の場面を思い出し、共感的に捉えている生徒が多かった（図2）。また、演技の工夫の理由を全体で共有することで、自分と友達の考えとの相違に気付かせるとともに、思考を深められるよう留意した。

(2) 終末の時間の充実（手立て2）

終末の場面で道徳的価値に迫る教師の説話を聞くことで、生徒個々が考えを深め自己の生活について見つめ直すきっかけとした。授業後の生活態度の変容としては、授業開始時刻を守ろうとしたり、ノー

トやワーク等の提出期限を厳守しようとしたりする雰囲気が学級全体で感じられるようになった。

- ・主人公と同じく大切なことを後回しにしているので、とても共感できた。
- ・最近主人公のような生活になってしまい、なかなか物事に手を付けられていなかった。授業を通して少しでも変わろうと思った。
- ・自分も切り替えができていないので生活を見直し、時間の使い方に気を付けたいと思った。
- ・生活リズムを整えるのは大切だと思った。

図2 生徒の振り返りと感想

4 授業実践Ⅰの成果（○）と課題（▲）

(1) 体験的な学習

- 役割演技を通して、登場人物の状況を自分に置き換えて捉えやすくなった。
- 役割演技は主人公の心情に近付いて考えることで自分の行為や感じ方、考え方を再認識したり、道徳的価値を自分との関わりで捉えたりすることができるといった効果が得られることが分かった。
- 役割演技を通して考えたことについて、意見交流の場を設けることで多様な意見に触れ、多面的・多角的に思考することができた。

▲表現活動の苦手な一部の生徒がいたので、演技を通し自己を見つめ考えを深めるための追体験ができるように、活動に取り組みやすくなるための支援を準備し、その時々感情や自己の体験を想起させる等の手立てを講じる必要があった。

(2) 終末の時間の充実

- 生徒が道徳的価値をより身近に感じることで、教材の問題点を自分のこととして思考できるようになった。
- ▲本時の道徳的価値に沿った説話をする際に、抽象的な表現があったので具体的に話す必要があった。
- ▲説話の内容の精選ができておらず、話が長くなってしまった。要点を絞って端的に説話をし、焦点化を図る必要があった。

(3) 授業実践Ⅱに向けて

役割演技を導入することで登場人物の心情に自分を重ねて考えることができた。しかし、生徒は取組そのものに意欲的だったり消極的だったり個人差があった。演技は自己を見つめ考えを深めるための追体験の一つの方法なので、演技の完成度を求めすぎないように留意する。

説話では、生徒の学びの充実につながるように短時間でも考え続けることにつなげる説話を準備する。そのためには、身近な事柄や社会的な事柄など幅広い情報の中から、生徒の実態や内容項目に合致した話題を選定していく。

5 授業実践Ⅱの取組

主題名 真の友情とは「B（8）友情、信頼」
教材名「合格通知」（東京書籍 新しい道徳3）

〔本時の展開〕

- 1 教材のテーマに関心を持つ。
- 2 課題（テーマ）をつかむ。
- 3 範読を聞き主人公と登場人物のやりとりの様子を捉える。
- 4 役割演技を行い、登場人物の気持ちを考える。
- 5 親友との不和をどのように乗り越えるか考える。
- 6 「友達と固い友情を築く」には、どのようなことが必要なか考える。
- 7 説話を聞き、自分の考えを深める。

（1）体験的な学習（手立て1）

登場人物の心情に自分を重ねて考えつつ、道徳的価値を自分のこととして捉え、自己を見つめるための方法として役割演技を設定する。登場人物の感情の行き違いが生じたときの気持ちに近付けさせる意図で実践する。そして、役割を交換することで異なる立場の視点から考えを深めさせる。演技後には登場人物の気持ちについて意見交換を行い、さらに全体で同意見の生徒と関連付けさせる。留意点として、その出来事の場面に気持ちが入り込めるようにセリフのみを抜き出した資料を用意する。

（2）終末の時間の充実（手立て2）

自己を見つめ考えを深める終末の時間の工夫として、道徳的価値に係ることわざを取り入れた説話を行う。生徒の道徳的価値に対する思いを整理し、一層深めさせるよう、答えが一つにならない説話をする。留意点として、本時で完結するのではなく、授業が終わった後も、自分自身の中で継続して思考を深め続けたり、考えを温められたりできるように配慮した説話を用意する。

6 授業実践Ⅱの成果（○）と課題（▲）

（1）体験的な学習

- ワークシートの振り返りから、「主人公の心情を考えること」に対し、よくできたと答えた生徒が7割、できたと答えた生徒が3割だった。以上のことから登場人物の心情に近付いて考えることに対し、有効な手立てであることが分かった。
- 役割演技に関しては、活動そのものに意欲的に取り組む生徒が多く、登場人物の心情に自分を重ねて考えることができた生徒が多かった。
- 相手の気持ちを慮って人間関係を構築することが大切ということに触れている発言が目立った。
- ▲演技に取り組むこと自体が主目的になってしまっ

た生徒もいたので、活動の意図を念頭に置いて取り組ませる必要があった。

▲範読時の指示や活動の説明の言葉が抽象的だったことで、生徒は具体的なイメージがつかめず、円滑な活動にはならなかった。

（2）終末の時間の充実

○生徒は真剣に授業者の説話を聞き、本時の道徳的価値を主体的に考え、身に付けようとしていた様子が振り返りシートと本時の映像記録からうかがえた。

▲ことわざは出来事に説得力を持たせるために効果的なものだが、ことわざによってはそれ自体がそのまま生徒に価値を定着させることになるため、一例として紹介する際にも深入りしないことと示す順序に留意する必要があった。

▲生徒によって多種多様な反応・受け止め方・判断基準があるので、答えが一つに留まらず、考えが様々に広がるような説話を用意し、生徒の思考を深めることが必要であった。

7 研究のまとめ（年間を振り返って）

主題にある道徳的価値を自分のこととして捉えるために、役割演技を設けた授業を実践してきた。授業実践Ⅰでは、役割演技を過去に経験はしていたようで、どういうものかある程度理解している生徒は多かった。授業実践Ⅱでは授業実践Ⅰを経験し役割演技で登場人物の気持ちを考えることで、自分の考えを明確にしたり、思いをより深めたり、自分の体験したことを想起したりすることができた。また、体験の振り返りとして級友と意見交流したことで、多様な視点から価値に関わる自身の考え方、感じ方を深められたことから、自分の行為や考えを再認識できた生徒が多くなったことがワークシートから読み取ることができた。

自己を見つめ考えを深めることに関して、終末の時間を充実させるために説話を設けた終末を実践してきた。それぞれの中でより考えを深める説話を用意しようと努めたが、十分とは言えない内容だった。

授業実践Ⅱでは、本時の教材に沿ったことわざを授業者のコメントを添えての紹介と、答えが一つにならない説話を行った。しかし、本時で完結するような短絡的な説話にならないように意識しすぎたことと友達関係の不和に焦点を絞りすぎたことで、道徳的価値からややずれた説話になってしまい、説話の吟味の難しさを実感した。それでも生徒は真剣に聞き、道徳的価値を主体的に考え、身に付けようとしていたことが振り返りのワークシートからうかがえた。

授業実践Ⅱの後に行ったアンケート調査の結果を基に主題に迫ることができたのかを検証した（図3）。

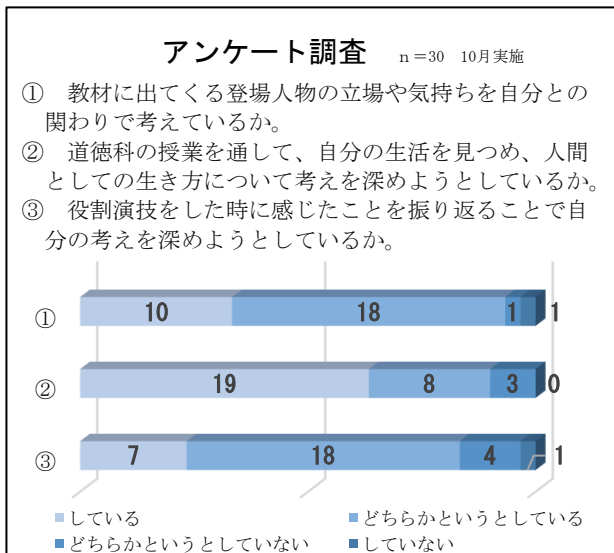


図3 授業実践Ⅱ事前アンケート調査の結果

(1) 道徳的価値を自分のこととして捉えていたか。

生徒の日常生活や共通体験を基にした導入場面の設定として生活体験の想起や役割演技を設けたり自分との関わりを持たせ、問題意識を高めさせるための教材に関連する意識調査結果の紹介や資料・発問を提示したりしてきた。その結果、生徒は身近な題材が提示されたことで取り組みやすくなり、主体的に臨む姿勢が授業の様子から見て取ることができた。

(2) 自己を見つめ考えを深めていたか。

道徳的实践意欲・態度を育てる体験的な学習として、教師側が明確な意図を持って役割演技をさせ、そのとき感じたこと、考えたこと、自分の体験を想起したことを振り返らせることで、生徒にとって道徳的価値の理解を深めたり、自分の生活上で生きる新しい気づきを生ませたりできるように授業を進めてきた。授業実践Ⅱに係る事前アンケートの結果から「役割演技をした時に感じたことを振り返ることで自分の考えを深めようとしているか」の問いに「している」と答えた生徒について、前回は約6割だったが、今回は8割だった。

役割演技後、級友の様々な意見を聞き、考え方に幅が出てきたことと、今回の授業を経て、より自分自身の感じ方や考え方を再認識し、自分との関わりで捉えることができるようになったことがこの結果につながったと考える。

授業実践Ⅱの振り返りの記述内容を分析すると、級友との不和が生じた際に、約4割の生徒が「相手の気持ちを理解する」と記述していた。生徒のワークシートには本時の授業のねらいからそれた感想があったので、教師が本時の道徳的価値を明確に持って授業に臨むことで必要な働き掛けをできるようにする必要があった。

(3) 人間としての生き方について考えを深められていたか。

道徳的实践力の高まりにつながる振り返りの時間の確保として、自己を見つめ、教材を通して理解し

た道徳的価値等について更に考えを深められるような発問や説話を設けることで、様々な場面及び状況において適切な行為を主体的に実践しようとする資質を育成できるように授業を展開してきた。

図3のアンケートの結果から、「道徳科の授業を通して人間としての生き方について考えを深めようとしているか」の問いに、「している」と答えた生徒について、前回は約7割だったが今回は約9割となり、より深く考える生徒が増えたことが分かった。様々な級友の意見を聞き、思考の幅が広がったうえで、「本時の振り返り」を書かせた。役割演技を通し生徒がこれまで経験したことや近い経験について追体験することで、自分自身との関わりとして捉えることができた。また、一方でこれまで経験していないことを体験することで新たな気づきが生まれ過去の経験から得た知識や判断基準、考えが深まったり、他者の意見を聞くことで新しい捉えにつながったりしたことがワークシートの記述からうかがえた。さらに役割演技の体験が自己を見つめ考えを深めることにつながっていることも同様にワークシートの記述から見て取れる。授業後の振り返りとして説話をするすることで、生徒の思考を深めたり、考えを整理したりする効果があることが分かった。しかし、指導者の話題の選定が道徳的価値からそれると、生徒の思考がねらいからずれてしまう危険性があるので話題の吟味が重要になることが分かった。また、本時の中で終結しない話題の選択が要であることも同様に理解できた。

事後アンケートの結果から「道徳科の授業は将来役に立つと思うか」の問いに「思う」と答えた生徒が96%を記録した。このことから、生徒各々が道徳的価値を自分の事として捉えていることが分かった。

8 今後の課題**(1) 体験的な学習方法の一層の工夫**

自己を見つめるための方法として役割演技を行ったが、登場人物の心情を自分の事と捉え、考える上でより効果的な方法を探っていきたい。

また、道徳的価値を自分との関わりで考えることができるように、問題場面について生徒の考えの根拠について問う発問をしたり、問題場面を自分自身に置き換えて考えるための方法を探ったりしていきたい。

(2) 終末の充実についての工夫

生徒の道徳的価値に対する思いを整理し、一層主体的に考えられるよう、より考えを深められる説話やことわざ、格言、時事問題や標語などを精選していく。また、生徒が道徳的な課題を乗り越え成長したことを実感、確認できるような工夫をすることで理解が深められるような指導方法を工夫し、更に研究を深めていきたい。